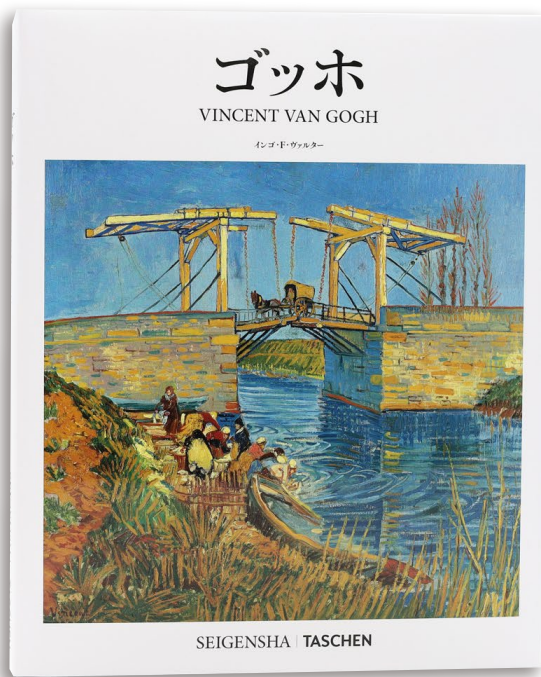
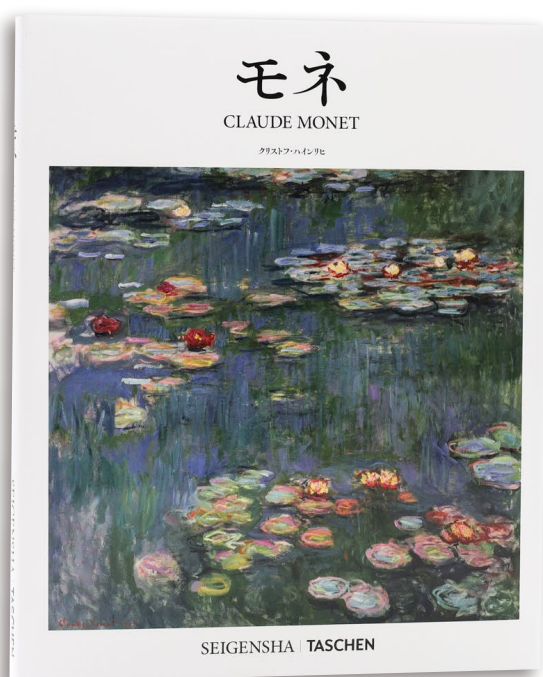


平素より大変お世話になっております。

このたび小社では、標記の書籍を刊行する運びとなりましたのでご案内申し上げます。

ヨーロッパを代表する
アートブックの出版社・TASCHEN(タッシェン)と青幻舎の
コラボレーションが実現!

**第一弾は、世界的ロングセラー「ベーシック
アートシリーズ」の日本語版『モネ』『ゴッホ』
2タイトルを同時刊行!**



株式会社青幻舎は、ドイツの美術出版社・TASCHEN(タッシェン)とパートナーシップを結び、同社が手がけるアートの入門書シリーズ「ベーシックアートシリーズ」の日本語版を10月上旬に創刊しました。その第一弾は、印象派の巨匠「クロード・モネ」を取り上げた『モネ』と、短くも激動の生涯を送った「フィンセント・ファン・ゴッホ」を取り上げた『ゴッホ』の2冊となります。

本書への取材などご要望がございましたら、下記担当までご一報下さい。何卒よろしくお願い申し上げます。

株式会社青幻舎 東京支社

〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-14-3-6F

TEL 03-6262-3420 / FAX 03-6262-3423

広報担当・太田 | oota@seigensha.com

■ 書籍概要

「ベーシックアートシリーズ」とは、ドイツの出版社・タッシェンが1985年に刊行をスタートして以来、世界80カ国で販売され、20カ国以上で翻訳されてきた、大人気のアートの入門書シリーズです。

一冊ごとに一人の作家を取り上げるスタイルの本シリーズは、作家の初期作や代表作などを中心にセレクトされた美しい作品図版とともに、その時代背景の解説や作家自身の言葉を交えながら、作家の生涯を詳しく紹介しています。コンパクトなサイズとボリュームでありながらも、巻末には写真付きの略年譜も収録されているなど、充実した内容は、“美術の必携書”として高く評価されてきました。

そして、この秋より待望となる「ベーシックアートシリーズ」の日本語版の刊行がスタートします。

記念すべき創刊第一弾では、印象派の第一人者「クロード・モネ」と、ポスト印象派の巨匠「フィンセント・ファン・ゴッホ」を取り上げ、2冊を同時刊行。それぞれの画家の作品や生い立ちを丁寧に紹介し、読者が手元でじっくりと名画に浸ることができる構成となっています。

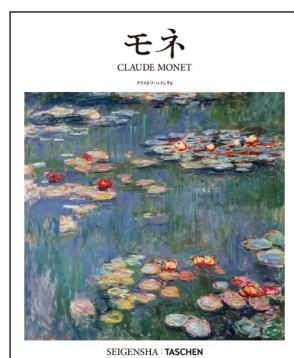
世界中で愛されてきた人気シリーズの日本語版は、展覧会をより楽しみたい方、好きな画家を深く知りたい方といったアートファンにおすすめなのはもちろん、アートビギナーのための入門書として、また、ギフトブックとしても喜ばれる一冊です。

シリーズ第二弾は2026年夏頃を予定。「ピエール＝オーギュスト・ルノワール」と「フランシス・ベーコン」の2タイトルを同時刊行します。

TASCHEN(タッシェン)とは…

1980年にドイツのケルンで創業したアート、デザイン、建築など多彩な分野の書籍を手がけている出版社。

「革新的で美しい美術書を大衆的な価格で提供する」という理念のもと、世界中の名作や貴重なコレクションを収めた作品集のほか、アート関連書籍を20以上の言語で刊行している。



■ 書誌情報

発売: 2025年10月 上旬
書名: SEIGENSHA|TASCHEN
Basic Art Series
モネ CLAUDE MONET
著者: クリストフ・ハインリヒ
判型: 266×216 mm
総頁: 96頁
製本: 上製
定価: 2,750円(本体2,500円)
ISBN: 978-4-86831-000-6 C0071



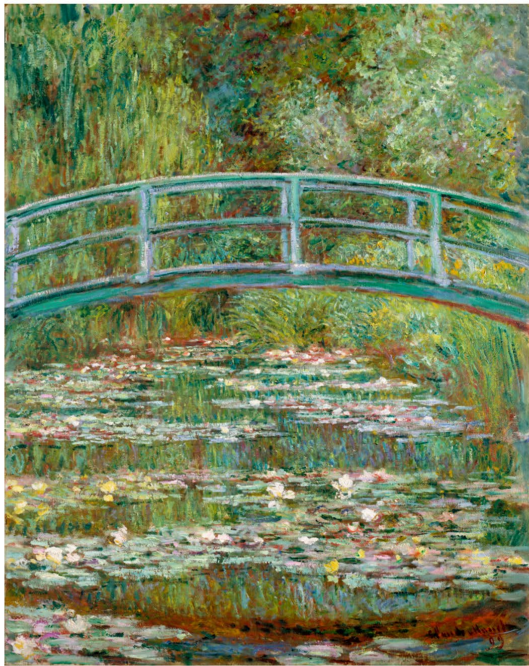
■ 書誌情報

発売: 2025年10月 上旬
書名: SEIGENSHA|TASCHEN
Basic Art Series
ゴッホ VINCENT VAN GOGH
著者: インゴ・F・ヴァルター
判型: 266×216 mm
総頁: 96頁
製本: 上製
定価: 2,750円(本体2,500円)
ISBN: 978-4-86831-001-3 C0071

■ 内容紹介

モネ CLAUDE MONET

雲の流れ、水面の煌めき、風に揺れる花。それらの一瞬一瞬の輝きをキャンバスに永遠に留めようとした画家、クロード・モネ。本書では、『カミーユ（緑衣の女性）』『印象、日の出』『ルーアン大聖堂』『睡蓮の池』など、名作・大作101点を通じて、光を信じ、光を描き、光とともに歩んだモネの86年間の生涯をたどります。



ジヴェルニーの庭

1901年8月、『フィガロ』の美術批評家アルセウス・アレクサンドルは、モネが人生の後半を過ごしたジヴェルニーの第一印象を記した。「そしてついに、ジヴェルニーが道の終わりに家を見た」と。「やや個性に欠けるものの、美しい村だ。田舎としての一面と、小さな町としての一面が半分ずつ同居している。だが、立ち止まりたいという強い衝動に駆られることもないまま村の外れにたどり着き、そのままヴェルノンへ向かって進むうちに、突然、新たな意外な光景の出迎えを受ける。大きな驚きとは常にそういうものだが、あまりにも予想外だ。パレット上のあらゆる色を、ファンファールを奏でる金での音色を、想像してみたい。それがモネの庭なのだ！」。

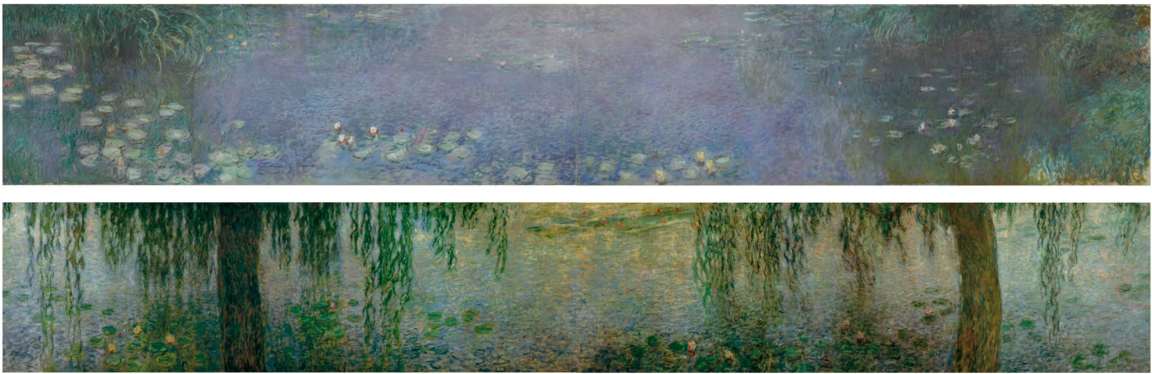
1880年代半ばから、モネには定期的な売り上げがあったので、経済状態が安定した彼は、1890年には自宅を購入するまでになった。彼は次に土地（繰り返し買い足し、何年もかけて持ち分を広げていった）に目を向けるようになり、大きなエネルギーと熱意を傾けながら、家族のためのすみかを作ることに加えて、自分自身の地主の来画——ジヴェルニーの庭を築き上げることも成功した。

出だしは一帯一帯ではいかなかった。モネ夫婦は、未婚のまま8人の子どもたちを連れてジヴェルニーに移り住んだので、明らかに、農村社会の古いものの見方に進む傾向があった。このモネなる男は新時代の画家との触れ込みで、夜明けに、絵の具とキャンバスを積んだ一輪車を押す子どもたちを引き連れて牧草地を横切り、水や穀物の山の前に陣取りと。キャンバスを延々と取り替えてながら、そこに誰でめくくく々な絵を描き付けた。地元住民はすぐに、この変わり者を自分たちの利益にする方法を見つけた。彼が絵を描くために自分たちの畑を通り抜けると、そのたびに通行料を徴収したのだ。彼らはまた、モネがひとたび題材を決めて制作に打ち込み始めると、その題材である穀物の山を崩したり、ボラの水を切り倒したりと邪魔をするので、モネは思いどおりのモチベーションを維持するのに大いに苦労しなければならなかった。その後、モネが自分の庭に池を作り外来植物を植えようと計画すると、村人たちの反対に遭った。いわく、そういう植物は洗濯物を傷めたり（彼らは川で洗濯していた）、庭の下流で草を食む家畜たちにとって有毒だったりするかもしれない。



睡蓮の池を描くモネ。睡蓮のプランシェ・オシュデ・モネとニティ・サレロンと共に
1915年

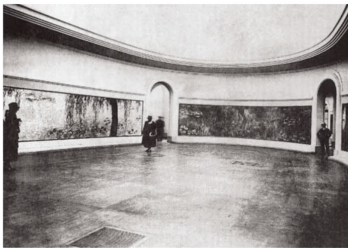
睡蓮の池
1899年
キャンバス・油彩
92.7x73.7 cm
ニュー・ヨーク、メトロポリタン美術館



(上)
睡蓮、朝（4連画）
1914-20年
オランジュリー美術館の第1室
キャンバス・油彩
200x137.5 cm
パリ、オランジュリー美術館

(下)
睡蓮、朝、しだれ柳（3連画）
1916-20年
キャンバス・油彩
各200x425 cm
パリ、オランジュリー美術館

大アトリエのモネ
1923年頃



オランジュリー美術館の第2室

画家のアンドレ・マッソンは、パリのオランジュリーを「印象派のレスティオ・カサ」と呼んだ。モネの死後、彼が目に写した睡蓮のバネムがここで一般公開された。

■ 内容紹介

ゴッホ VINCENT VAN GOGH

オランダの小さな町に生まれ、仕事にも愛情にも恵まれず、信仰にも救われることができなかったフィンセント・ファン・ゴッホ。彼が唯一、心の拠り所としたのは絵を描くことでした。37年という短い生涯で遺した《ひまわり》《夜のカフェ》《耳に包帯をした自画像》《花咲くアーモンドの枝》など名作74点とともに、死後に世界的評価を得た画家の実像に迫ります。



26

27



フィンセント・ファン・ゴッホ 1853-1890

生涯と作品

1853年 3月30日、オランダ改革派教会の牧師
テオドロス・ファン・ゴッホ(1822-1885)と、ハー
グの税本業者の娘アン・コルネリア(旧姓
ヘーベス、1819-1890)の間に、6人きょうだい
の第1子としてフィンセント・ウィレム・ファン・
ゴッホが生まれる。彼には、前年の同日に死産
で取り上げられた子どもと同じ名前が付けら
れた。

1857年 弟テオドロス・フィンセント(テオ)が
生まれる。

1861-1864年 ズンデルトの村の学校に通う。

1864年 ギョーゲン・バーゲンに私立寄宿学校
に入塾。フランス語、英語、ドイツ語を学び、
デッサンの訓練を受ける。

1866-1868年 ティルブルフの寄宿学校に
通う。

1868年 学校を退学し、ズンデルトに戻る。

1869年 ハーグに行き、おじのフィンセント
が設立したパリの美術商社グーデル・カッセル
の支店に入る。H・G・カッセルの配

下で複製画を販売する。読書家である一方、美
術館に足を運ぶ。

1871年 父がグランド・パントのヘーグ・イェ
リとして赴任することになり、ゴッホも家族
と共に同地に移り住む。

1872年 休館を両親の家で過ごし、ハーグの
弟を訪ねる。これが2人の間での膨大な書簡の
交換の始まりとなる。

1873年1月 おじの意向でグーデル商会のブ
リュッセル支店に赴任する。

5月 ロンドン支店に移動。出展前にパリを訪
れ、ルーヴル美術館を見学して感銘を受ける。

6月 ロンドンのグーデル商会で1年間働く。
数歩の道中「切符」でメッセンジャーを働くが、これ
は放棄する。家主の娘カラスに恋心を抱く。
彼女に拒絶され、私生活に難局が訪れる。

11月 弟のテオがグーデル商会のハーグ支店
に赴任する。

1874年夏 ヘルヴェットの両親の下で休暇
を過ごし、個人的な失望を打ち明けて愛慕的な思
いを伝える。7月中旬、妹のアンナと共にロン
ドンに戻る。孤独な生活を送り、仕事にはとん

ど興味が示さない。読書に明け暮れ、特に宗教
書を読みあさる。

10-12月 おじの手で、一時的にパリのグー
デル商会社に異動させられる。おじは環境を
変えることでゴッホの状況改善を期待した。

1875年5月 最終的にパリス・展覧。自分の仕
事をおろそかにし続け、同僚や顧客を悩ませ
る。美術館や画廊を訪ねては、ローマや17世紀
のオランダ絵に熱中する。

10月 テオ・ド・ロス牧師がブレダ近郊のメッ
センに移る。

12月 ゴッホは事前に休館を申請しないま
ま、クリスマスまで同僚と過ごす。

1876年4月 グーデル商会に辞表を出す。ロ
ンドン近郊のラムズゲートに赴き、代読教員と
して働く。食事を宿舎で支給される。

7-12月 ロンドン郊外の労働者階級の町アイ
ルワースに移り、代読教員を続ける。その後、
メッセンの牧師とともに見習い・婦人説
教師兼教員として働く。11月に初めての説教
を行い、若い人々の福音に生涯を捧げたい
と考える。牧師への尊敬は対照しており、牧師
にハンブロン・コートと名乗る。クリスマス
にはメッセンの両親を訪ねる。星の降



フィンセントの父、テオドロス(テオ)・ファン・
ゴッホ(1822-1885)。1888-1890年頃撮影



フィンセントの母、アン・コルネリア・ファン・
ゴッホ、前掲「セント・パウルス」(1819-1890)



フィンセントの妹、アン・コルネリア・ファン・
ゴッホ、前掲「セント・パウルス」(1819-1890)